

第10期札幌市図書館協議会

第 1 回会議

議 事 録

日 時：2024年5月27日（月）午後2時開会
場 所：中央図書館 3 階 講 堂

1. 開 会

●事務局（中村運営企画課長） それでは定刻となりましたので、ただいまから第10期札幌市図書館協議会第1回会議を開催いたします。

本日は、お忙しい中をお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。私は事務局を担当させていただきます、中央図書館運営企画課長の中村と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日、現段階でのご出席は11名となっております。

欠席する旨のご連絡をいただいておりますのは、玉村委員の1名となっております。

出席者数ですが、札幌市図書館条例施行規則第27条第2項に規定するとおり、委員の過半数を超えておりますので、会議が成立しておりますことをご報告させていただきます。

議事に先立ちまして、本日の資料について確認させていただきます。

既に送付させていただきました資料として、札幌市図書館協議会委員名簿、「札幌市の図書館2023」、こちらは冊子になっているものでございます。また、本日の資料としまして、資料1「札幌市図書館協議会の概要」、資料2「（仮称）こども本の森のコンセプトや機能について」、資料3「令和5年度来館者アンケート集計結果」、資料4「令和5年度札幌市の図書館の「将来の在り方」についての調査研究業務（要旨）」、以上のものを送付させていただいております。

それから、本日机の上にご用意させていただきました資料として、本日の座席表と、次第をお配りしております。

不足している資料等ございましたらお知らせください。

また本日ですが、議事録作成のために録音の必要がございますので、お手数ですがご発言の際にはマイクをご使用いただきますよう、よろしくお願いいたします。

それでは開会にあたりまして、中央図書館長の前田より、ご挨拶を申し上げます。

●事務局（前田中央図書館長） 中央図書館長の前田でございます。委員の皆様にはお忙しい中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。

本日の議題にもあります「（仮称）こども本の森」につきましては、これまでも情報提供させていただいたところですが、初めて聞く委員の方もいらっしゃいますので、簡単に経緯をご説明させていただきます。

「こども本の森」は建築家の安藤忠雄氏が設計・建築して自治体に寄贈されております、子ども向けの図書施設となっております。

これまでに大阪市、岩手県遠野市、神戸市、熊本県に寄贈され、開館しております。令和7年には愛媛県松山市でも開館予定となっております。

札幌には、北海道大学の構内に整備される予定となっております、札幌駅に近い北大南門から西側に50mほど進んだ場所が、建設候補地として決定されております。

昨年11月には、安藤研究所、北海道大学、札幌市の三者で基本合意を締結し、札幌市はこの図書施設の運営に参画することとしておりまして、令和8年夏頃の開館を目指しているところでございます。

今年度はその運営に係る方向性をまとめたいと考えておりまして、本日は運営のコンセプトや機能などについてご説明させていただきます。

また、このほかにご説明させていただきます、図書館の将来の在り方についての調査研究につきましては、特に地区図書館の将来像に焦点を当てた内容となっております。

委員の皆様には忌憚のないご意見をいただきますようお願い申し上げまして、開会にあたっての挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

●事務局（中村運営企画課長）　続きまして、委員にご就任いただきました皆様のご紹介をさせていただきます。

委員名簿に沿ってご紹介しますので、お名前を呼ばれた方につきましては、恐れ入りますがその場でお立ちください。

それではご紹介させていただきます。

氏家　夏未　委員です。

大澤　夏美　委員です。

國仙　ゆかり　委員です。

斎藤　仁史　委員です。

佐藤　優子　委員です。

杉山　一夫　委員です。

高田　みのり　委員です。

玉村委員は欠席のご連絡をいただいております。

富田　敏明　委員です。

新田　孝彦　委員です。

松本　秀人　委員です。

米田　朋弘　委員です。

皆様ありがとうございました。

続きまして、図書館協議会の位置づけにつきましてご説明をさせていただきます。

資料1をご覧ください。

当図書館協議会は、図書館法第14条および札幌市図書館条例第11条の規定に基づき設置するものでございます。

この協議会は、図書館の運営に関して、館長の諮問に応ずるとともに、図書館の行う図書館奉仕について館長に対し意見を述べる札幌市の附属機関となっております。

なお委員の皆様の身分については特別職の公務員という扱いになっておりますので、守秘義務が課されております。

この図書館協議会は、情報公開の趣旨に照らしまして、原則公開することとなっております。また、会議の内容につきましては会議録を作成し、公表することにもなっております。

また、当協議会において決する事項につきましては、札幌市図書館条例施行規則第27条第3項に基づき、出席委員の過半数で決めることとなっております。

なお、傍聴につきましては、この協議会のための規定というのがございませんので、札幌市教育委員会会議の傍聴に関する規則を準用することとしております。

2. 議 事

●事務局（中村運営企画課長） それでは議事に移りたいと思います。

まず、議題1「会長および副会長の選任について」です。

本日の会議は第10期協議会の最初の会議でございますので、会長が決定されるまでの間、私の方で進行を務めさせていただきます。

会長、副会長につきましては、札幌市図書館条例施行規則第26条第1項の規定に基づき、委員の互選で選んでいただくことになっておりますが、ご推薦やご意見などございませんでしょうか。

●米田委員 皆さん、ほぼ初対面ではないかと思いますので、その中で互選というのはなかなか難しいと考えます。そこで、これまでこの会議のことをよくご存知でいらっしゃる方が会長、副会長となるのがふさわしいのではないかと考えます。

そこで昨年度より引き続きということで、新田委員に会長を、斎藤委員に副会長をお願いすべきではないかと考えております。

●事務局（中村運営企画課長） ただいま米田委員から、新田委員に会長を、斎藤委員に副会長をお願いしてはどうかということでご意見をいただきましたが、皆様いかがでしょうか。〔委員の皆様から承認〕

ありがとうございます。皆様から承認をいただきましたので、新田委員、斎藤委員にそれぞれ会長、副会長をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは恐れ入りますが、新田委員、斎藤委員につきましては会長席、副会長席にお移りください。

これからの議事進行につきましては、図書館条例施行規則第26条第2項の規定によりまして、会長は協議会を代表し、会務を総理することとなっておりますので、以後、新田会長をお願いしたいと思います。新田会長、よろしくお願いいたします。

●新田会長 新田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど説明がありましたように、この会は、図書館の運営に関して館長の諮問に答えること、それからもう一つは、図書館の行う奉仕に関して館長に意見を述べるのが任務となっておりますので、皆さん、活発な意見交換を期待したいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは議事を進めてまいります。

議題2、「（仮称）こども本の森」のコンセプトや機能についてということでございます。これにつきまして、まず事務局から説明をお願いいたします。

●事務局（野村調整担当係長）

調整担当係長の野村と申します。資料のご説明をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

資料「「（仮称）こども本の森」のコンセプトや機能について」をご覧ください。

冒頭、館長からご説明のとおり、昨年11月に基本合意書の締結をしております、札幌市としては現在、運営の方向性を定める作業を進めているところでございます。

本日は図書館運営の根幹となる部分といたしまして、大きく、コンセプト、それからサービスを構築する機能、この二つを中心にご説明したいと思っております。

まず資料の左上、施設の位置づけと書いている所をご覧ください。

皆様ご承知のとおり、特に小学校から中学校へ進む段階におきまして不読率、これは1か月に1冊も本を読まなかった子どもの割合ということになりますけれども、大幅に増加をしております。

いわゆる学齢期の読書離れと言われておりますけれども、これは長年の課題ということになってございます。

この課題には札幌市といたしましても、これまでも例えば中央図書館にティーンズの森を設置したり、電子図書館、それからえほん図書館の開館を通じまして、子どもの読書環境の充実に努めてきたところでございます。

このたびの「こども本の森」につきましては、下線部をご覧くださいいただければと思いますけれども、小中学生を主な利用対象者として、学齢期からの読書習慣形成を主たる目的とした、機能を特化した図書館、すなわち機能分館として位置づけて開館を目指すということにしております。

続きまして、ヒアリング調査と書いている所のご説明です。

この方向性を定めるにあたって、検討に先立ちまして、昨年度ヒアリング調査を実施しております。これは「こども本の森」に対するニーズであるとか、今の子どもの読書傾向を把握するために行ったものでございます。

ヒアリングにつきましては、小学生、中学生、高校生、一般で19名、それから施設関係者ということで北海道大学の関係者や北大生に実施したほか、「こども本の森」の先行施

設ということで中之島と神戸の館長や、有識者、これらの方々にお話を聞いております。

このうち小学生、中学生、高校生や北大生、一般の方に対しては、ブックディレクターというお仕事をされている方による、少人数、6名から7名程度になりますけれども、グループインタビューという形でヒアリングをさせていただいております。

当日どんなことを聞いたかという、新しいこの「こども本の森」にどういったことを期待しますかですとか、実際にその会場で、テーブルの上に本を一杯並べて、この本の中から直感で構わないので興味のある本を2冊選んでくださいということで、選んでいただいた後に、なぜそれを選んだかですとか、普段どういった観点で本を選びますかといったことを、マンツーマンで聞き取っていくような方法で実施しました。

その結果、「（仮称）こども本の森」に求められることとして、内容をまとめております。

一部お話いたしますと、例えば「新たな興味を引き出す本と出会う」で記載しているのは、簡単に言うと従来の図書館とは違う本の並べ方を行うことで、新たな1冊に出会えるような意見が多かったということになります。

「本と出会うことによって成長する」では、哲学に興味を持つ、中学生ぐらいのお子さんが複数いらっしゃったのが、印象的でした。

そのほか、「学び舎の中にあることで、様々な文化や知識に触れられる」では、北大ならではの話ではありますが、教授の中には海外からお子さんを連れの方も多数いらっしゃるということで、そういった子どもたちとの交流が期待できるのではないかということ、それから「自然豊かな環境を活かす」ということで、右下に飛びますけれども、北大キャンパス全体を活用した取組といったことにも幅広く要望をいただくことができました。

このような結果を受けまして、資料右側「コンセプトと3つの方針」と記載しておりますけれども、まずコンセプトにつきましては、「こどもに知をひらく」と設定させていただきました。

これは北大が有する「知」、知識を子どもたちにひらくことのほか、本との出会いを通して「知」の扉をひらき、新たな学びと創造の世界へいざなうことを意図したものであります。

また、このコンセプトに基づきまして、3つの方針を定めております。

「本との出会いから、世界への好奇心と想像・創造力を育む」、「多種多様な 知や人とつながり、学びを深める」、「魅力ある空間や 豊かな自然の中で、読書に没入する」。それぞれその下に記載したように、方針として整理してございます。

次に、このコンセプトと3つの方針を実現するために、サービスを構築する3つの機能ということで、改めて整理をしております。

具体的に申し上げますと、誘発、交流、体験、この3つの機能を柱としたサービスを構築したいというふうに考えております。

まず誘発機能でございますけれども、こちらは本の種類ですとか、対象年齢別に分け隔

てるのではなく、ある種横断的な選書や配架により本との出会いを誘発していくことを、一つの機能として実現していきたいと考えているところです。

2つ目、交流機能です。こちらは北海道大学との連携は当然のことながら、子どもたちにとって身近な存在である市立図書館や学校との連携を図ることにより、様々な交流を生んで、サービスの向上を図ってまいりたいということで、一つの機能として掲げているものでございます。

3つ目、体験機能です。これは具体的に申し上げますと、「学びのプログラム」と名前をつけておりますが、大学のキャンパス内の自然であるとか、例えば北大博物館をはじめとする大学の施設、様々なものを活用しながら、ワークショップや科学実験などで子どもたちの好奇心を刺激し、楽しみながら学びや読書に繋げるプログラムを、大学生の協力を得ながら、定期的な開催を目指してまいりたいと考えております。

最後に、建設予定地については先ほど冒頭で館長から説明がありましており、南門から入るとすぐ左手、中央の赤く記した部分が建設予定地ということでございます。

また、開館までの大まかなスケジュールは記載のとおりです。

現在、安藤忠雄建築研究所の方では基本設計を行っていただいているところでございまして、ここには記載しておりませんが、北大の建設予定地におきましては、6月以降、埋蔵文化財の調査に入る予定と聞いております。一方、札幌市につきましては現在、庁内で様々な施設の方向性について議論をしているところでございまして、秋頃のパブリックコメントやキッズコメントを踏まえ、11月頃には運営の方向性をまとめることを目指して作業を進めているところでございます。資料の説明は以上になります。

●新田会長 どうもありがとうございました。

それではただいまの説明に関しまして、何かご質問、ご意見ございましたら、ご自由にお願いいたします。

●松本委員 松本です。基本的なことを、誤解しているといけないので確認したいんですが、この「こども本の森」は市立図書館の、札幌市の図書館の分館の一つと考えていいのでしょうか。つまり、予算を札幌市の図書館の費用でやるのか、それから組織の人員は札幌市の図書館の職員という位置づけなのか、それから選書の主導権も札幌市の図書館の側にあるのか。なぜ聞いたかと言うと、例えば北大はどう関わるのか、安藤忠雄事務所はどう関わるのかというのが気になるので、基本的なことをちょっと確認しておきたいです。

●新田会長 いかがでしょうか。

●事務局（犬丸調整担当課長） 調整担当課長の犬丸と申します。

市の図書館となるのか、どのような人員体制や運営をしていくかの質問ということでしょうか。

まず図書館の位置づけとしては、こちらの資料にも書いてありますように、新たな市立図書館として位置付けるということを考えております。

続きまして、どのように運営していくかということにつきましては、まだ現在検討中の部分がありまして、これから庁内検討に入るところでございます。もう少しまとまってからお示ししたいと考えておりますので、ご理解いただければと思います。

●事務局（前田中央図書館長） 少し補足ですが、北大との役割分担などでご質問があったかと思うんですけれども、簡単に申し上げますと建物自体は北大の所有になる予定ですので、それに伴う費用については基本的には北大が担うということになります。

札幌市は運営を担うということですので、運営をどういった仕方にとというのは今、課長から説明したとおりですが、大きく役割分担として、札幌市が市立図書館の機能分館として運営を担う、北大は安藤忠雄氏から寄贈を受ける建物を所有すると。それに伴う費用も負担するというので、今は整理を進めております。

●新田会長 よろしいでしょうか。佐藤委員どうぞ。

●佐藤委員 佐藤です。現時点で結構なのですけれども、北大の協力ということで、具体的に北大のどの部署、学部といいますか、どういうところに声をかけて、どういう学生との交流を期待されているのか、現時点の情報でもいいので教えてください。

●事務局（野村調整担当係長） どういった部署とやり取りされているかということですが、まだ開設準備連絡会という位置づけで我々と北大との間でいろいろなことを検討しているところなんですけれども、参加メンバーは社会連携課と附属図書館です。この二つの部署と今、私どもはお話しております。

大きい方向性を議論していく現段階においてはその部署とやり取りさせていただいていますが、北大の学生ということになると、まだ大学院生までしか視野に入っていないのですけれども、学務部と少しずつコネクションを取って話をし始めているというところがございます。

●新田会長 よろしいでしょうか。他にいかがでしょうか。はい、次お願いします。

●杉山委員 基本的なことでお伺いしたいのですが、ここができたとき貸出はされるのでしょうか、それとも、情報館のような扱いになるのでしょうか。

●事務局（犬丸調整担当課長） 図書の貸出をするかしないかについては、まだその部分も検討を進めているところでございます。

ただ、先行する施設の例を申し上げますと、本との出会いを大事にするというコンセプト、寄附者の思いがありますので、基本的に館内閲覧としているところがほとんどになっております。今おっしゃられたように、図書・情報館と同じように閲覧というような形でやっているところが多いので、そういった事例も参考にしながら、今後方向性を定めていきたいと考えております。

●杉山委員 私はこの経歴の中に書いていますように、私立のふきのとう文庫というところにおります。しかも北大との距離が近いところに所在しておりますので、この情報を聞いたときに興味津々だったのですが、ただ、聞いたときには閲覧だけというような、貸出ししないような話をちらっと聞いたことがありまして、それでお伺いしました。ありがとうございます。

●新田会長 他にいかがでしょうか。大澤委員どうぞ。

●大澤委員 大澤です、よろしくお願いします。

3点ほどありますが、一つずつ感想とか質問とかご意見とか、現時点でわかってることだけでもお聞かせ願えればと思った3点でございます。

一つ目ですが、コンセプトとサービスの機能のところをお見かけする限り、札幌市の図書館でありながら、あまり地域のことを学ぶとか、北海道のことを本を通じて学ぶといったものが無かったものですから、現時点で何かそういうものを盛り込む可能性があるのかどうかをお聞きしたかったという点が一つ。

もう一つが、実際に働くスタッフの方々に求められる役割がちよっと多いのかなという印象を受けまして、札幌市含め司書というものをレファレンスだけではなくて、子どもたち同士、学生同士、学生と子どもを繋ぐといった役目がすごく大きいなと感じていたので、現時点で、働く人として何か司書以外の役職や、スタッフも設ける可能性があるのかどうかをお聞きしたかったのが2点目です。

3点目ですが、北大の中の図書館ということで、学生と関わる機会というのをどうしても北大生が中心になるのかなと思いつつも、札幌にはたくさん大学がございますので、もっといろいろな大学生が集う場になることは可能かということ、3点お尋ねしたかったです。よろしくお願いいたします。

●事務局（犬丸調整担当課長） まずコンセプトの話として、もう少し地域性ですとか、そういった考えはあるのかという点ですが、ヒアリング調査を行った中で、北大生の方からもいろいろ意見を聞いております。

北大が持つ知見として地域の研究等を行っている学部がございますので、そういったものを、子どもたちにわかりやすく図書館で伝えて、関連するような本を紹介するというようなお話も出ていました。この資料からはその部分が読み取れないかもしれませんが、当然ながら札幌市としての独自性とか地域性というものも委員がおっしゃるように重要だと思いますので、引き続き具体的な内容を、今いただいたご意見も踏まえながら重視していきたいと考えております。

次に２点目、スタッフですが、スタッフについてこういった役割が求められるか、こういった人員を想定しているのかといった点について、「こども本の森」の場合、他の図書館とは少し違った選書とかをやっていききたいという考えがありますので、当然、司書については高い専門能力を持った方にノウハウを発揮していただきたいと思っています。

また、大学との連携が図書館の特徴にもなってくると思いますので、大学との連携をうまくコーディネートしていただけるような人材も必要と思っています。

さらに先行施設を見ていると、施設のロゴやデザインですとか、洗練された形でブランド作りをされているところが多いので、広報とかデザイン等のスキルも持っている方が図書館のスタッフとしては求められると思っています。

通常の図書館の事務職員と司書、それ以外に今申し上げた特別なスキルを持っている方に、運営を担っていただきたいと思っていますが、その手法については検討している最中がございます。通常の図書館に加えてプラスアルファのスキル、ノウハウを持った方がこの図書館で働くことによって、独自性を発揮していききたいと考えております。

最後に、北大だけでなくいろいろな形の連携ということで、現時点ではあまりこちらの検討の中で出ていませんでしたが、確かに札幌圏にはいろいろな大学がありますので、北大だけではなく他の大学とも、子どもや大学生同士が関われるような取組を実現することによって、子どもたちにとって学びの部分で学術を深めるといったこと等を、他の図書館では成し得ないような機能を、ぜひ実現できるように考えていきたいと思っていますところがございます。

●大澤委員 ありがとうございます。

特に２点目の、司書だけではないスタッフもぜひというお話があったのも、私自身博物館と関わる仕事をしており、博物館で働くイコール学芸員というように、子どもたちの視野が狭くなりがちな状況を日頃接していて感じる人が多いものですから、図書館イコール司書だけではない部分の選択肢や、魅力を広げる、逆にチャンスかもしれないなと思ってお話を聞いておりました。ありがとうございます。

●新田会長 他にいかがでしょうか。富田委員。

●富田委員 富田と申します。

コンセプトが学齢期間の読書習慣の形成ということで、大変良いな、アイディアとしては素晴らしいなと思います。

高校、大学と私も関わってきましたので、確かにこういう読書離れはあると思いますが、具体的にこのコンセプトを作るにあたって、先ほど先行施設についてはお話がありましたが、どういう先行事例というか、あるいは成功事例といえますか、非常に難しいと思うんですよね。読書離れが日本全国の課題で、どういう先行事例を参考にして、その先行事例のどういう部分がこのコンセプトの中に入っているのかというところを、少しお聞きしたいなと思います。少し拡散して、元々の目的というところが若干伝えにくくなってるかなという印象があるものですから、お聞かせいただければと思います。

●事務局（野村調整担当係長） 我々の方で参考とさせていただいたのは、あくまでも「こども本の森」を主体としておりまして、昨年1年という短い期間の中で参考とするには、時間的な限界もあり、あくまでも先行する「こども本の森」を参考事例にさせていただいたというところが正直、ございます。

従って、全国の子どもの読者離れに精力的に取り組んでいるような図書館で、どういうことをやっていて、こういう所を採用していこうということについては、調べきれていなかったというところではございます。

ただ、これまでの先行する「こども本の森」に携わっているスタッフのいろいろな方に意見を聞いて、これで全てが解決するというわけではありませんが、一つのきっかけとして非常に有効であろうということで、こういったコンセプト作りに繋げていったところではございまして、答えになってるかどうかわかりませんが、現状はそのような感じでございます。

●新田会長 よろしいでしょうか。はい、國仙委員。

●國仙委員 國仙です。

大人が読む本も含みながら、テーマに沿った多様な本を分け隔てなく選書・配架しますというふうに書いております。これだけ大きな規模の図書館となりますと、やはり本の冊数もかなり集めていかなければいけないと思います。

その中で、良質な本を選ぶ目というのを持って選書していかなければいけないと思うんですね。

もちろん、北大の学生や有識者で情報発信していくのはものすごく大切なことだし、若い人たちの育っていく道筋にもなるとは思います。並行して、札幌市内の図書館などで働いている司書や一般職の方にも、本の選び方や、発達段階に合わせたカリキュラムを実行する学校のような施設というの、並行して必要になってくるのではないのかなと私は思

うのです。

施設を生かすためにはやはり人材が、人が動かなければ、回らないところがあると思うのですが、そちらの方はどのようにお考えになっていらっしゃるのでしょうか。

●事務局（犬丸調整担当課長） 発達段階に合わせて読書習慣を身につけるために、いろいろな取組が必要ということで、その良質な本を選ぶための取組や、どのような考えがあるのかというご質問でよろしいでしょうか。

実は現在、我々の組織で、今年からこの「こども本の森」の関係で、新たに図書・情報専門員を1名配置しまして、その方の専門的な意見も聞きながら選書をどうやっていこうかですとか、配架をどうしようかですとか、計画を考えているところであります。発達段階に合わせて、どのような本を選べば手に持っていただけるかですとか、司書のこれまでの知見やノウハウを生かしながらということと併せて、より専門的な方に、他の「こども本の森」でブックディレクターをやっている方にも意見を聞きながら、今年、本のテーマですとかと一緒に検討していただくような取組も考えているところです。発達段階に合わせてどうやって読書習慣を身につけるかといった視点などで選書をやっていけるように、事務職員だけではなく、専門の方の意見を聞きながら実際の選書をしていきたいと考えているところでございます。

●國仙委員 ありがとうございます。

それと先ほど発達段階というような話をしたんですけれども、やはりきっかけは親、一緒に住んでいる方が本を与えることで読書習慣が身に付いてくるものだと思います。

やはり絵本から始まって、温かい心の交流があって、児童書を通して読書習慣という形に進んでいくと思います。

ですので、お母さんお父さんたちに対してのアプローチという面では、どのようにお考えになっているのかというのもお尋ねしたいのですが。

●事務局（犬丸調整担当課長） 主な対象を小中学生と考えておりますので、保護者と来られる方も、やはり多いと思います。そのため、保護者に対するアプローチも当然重要になってくると思います。

他の先行事例では、子どもたちの保護者に対してもイベントに参加していただく事例が有ると聞きましたので、子どもだけでなく取り巻く保護者も含めて、どうやったら読書習慣の形成ですとか読書活動の支援ができるのかということについて、引き続き考えていきたいと思っております。

●新田会長 よろしいでしょうか。それでは氏家委員。

●氏家委員 氏家です、よろしくお願いします。私、フリースクールでスタッフとして働いておりまして、不登校の小学生から中学生が10名以上通っている所なのですが、学童の子どもたちよりフリースクールの子供たちの方が本に触れる機会が結構多く有りまして、その小学生から中学生のお子さんにどんな本を読んでいるとか、どんな本が欲しいと聞いたときに、図書館を利用するのですが、こういう本を読みたいというときに、その希望に沿うものが無い事があるらしいんですけれども、図書館に行かないとこういう本が欲しいというのを言えないとか、自分が読みたいと思ったときに読めないという話を聞いていまして、その子どもたちの生の意見でしたり、要望はどのように反映していただけるのかなというのが聞きたいところでした。お願いいたします。

●事務局（犬丸調整担当課長） 子どもたちの意見の反映について、先ほど申しあげましたとおり、小中高生、一般の方にヒアリング調査を行い、結果的に19名の方に集まってもらって、そこでいろいろなお話を聞いているところでございます。

他にも、北大の中でプレーパークというイベントが予定されており、子どもたちが集まる場がありますので、そこでこの図書館に対するニーズや、例えばこういったイベント、または先ほど申し上げた学びのプログラムというのが考えられるか、そういったことをプレーパークの中で把握しようというのを現在、企画しているところでございます。

そのほか、先ほど口頭でお伝えしておりますけれども、コンセプトや機能、運営内容を含めてパブリックコメントに出す予定です。

その中で市民の方のご意見もお聞きしますし、キッズコメントという形で、まとめた内容を子どもが理解できるような形で、パブリックコメントを少しやさしくして子どもたちの意見を聞くというようなことも行います。そのような取組を通じて、利用者となる子どもたちの意見を、施設の運営やイベントに反映できるようにしていきたいと考えております。

●新田会長 ありがとうございます。他にいかがでしょうか。高田委員。

●高田委員 高田です。よろしくお願いします。

今の氏家委員の質問と少し重なりますが、ヒアリング調査は施設利用者、既に図書館を利用されている小中高生の方が対象だったということでしょうか。と言うのも、もしそうだとすれば、今回、読書離れが課題となっている中でそれをどう解消していくかということで、この「こども本の森」というコンセプトができていったと思うのですが、もう既に本と親しんでいない、図書離れになっている子たちが、いかに本との出会いの場を作っていくかが求められてるのかなと思ったんですね。

なので今、本と離れている子たちの意見が反映されている調査だったのかどうかというところを、お聞きしたいなと思って質問させていただきました。

●事務局（野村調整担当係長） 昨年のヒアリング調査に限ったお話でお答えさせていただきますと、募集段階では、おっしゃるとおり本を読む人たちがばかりに話を聞いても意味がないので、全然本を読まない子もぜひ来てくださいというような形で、募集はかけさせていただいております。結果として、こういうヒアリングに興味を持つのは、やはり日頃本に触れている子どもが多かったというのがあります。

ただ、全員がそうかと言うとそうではなくて、何人かは月に1冊も読んでないというお子さんも、人数ははっきり覚えていませんが含まれており、割合としては少なかったということでございます。

●高田委員 すごくそのジレンマがわかるなと思って回答を聞いていたのですが、そういったパブリックコメント等は、言葉を選ばずに言うと意識が高い親御さんだったり、既に読書習慣のあるご家庭で育っているお子さんが参加すると思うので、家庭の環境ですとかでなかなか本と出会う機会がない子に、いかにこのコンセプトが届いていくかというところが、そうになっていくとすごく嬉しいなと思って、皆様のお話を聞かせていただいております。ありがとうございます。

●新田会長 ありがとうございます。他によろしいでしょうか。米田委員。

●米田委員 米田です。

学校現場にいる者として、意見や質問ではなく感想になってしまいますけれども、小中学生が対象ということで来館利用の視点で考えると、中学生の平日利用は難しいと思います。6割から7割近くは部活に入っていますし、それ以外の子もクラブチームに入っていますから、中学生の利用は土日なのかなと思います。

それから小学生は放課後いろいろなことをしていると思いますけれども、中学生より割合は低いと思います。ただ小学生となると、今度は北大までの距離感というのが出てくると思うので、近隣の小学校に限られてくるのではないかと思います。

中学生の土日利用となると、交通機関として北大はそこまで行きやすい場所ではないと思います。ただ中学生は、かなりの距離を自転車に乗ることができると思います。考えられているとは思いますが、その辺の整理をしていかないと、利用者数が増えていかないのかなという感想を持ちました。

それから、選書、いろいろな企画や内容、コンセプト自体がどんなに優れていても、やはり利用されないとわかっていけないので、大学生も絡んでいるということで、もう案の中にあるかと思いますが、例えば大学生にTikTokやYouTubeの紹介動画などで、いろいろな場所で紹介してもらうとか、そのようなことをしていった方がよいと思います。

イベント、開館、こんなことをやりますよというのが学校に毎日のように何十種類もポスターで来るのですけれども、ポスターを貼り、子どもたちの目に触れたとしてもあまり

興味を引かないというのが現実です。それなら、小学生はちょっと分からないのですけれども、もうほとんどの子どもがスマホを持っているので、SNS等を利用した発信を大学生に頼み、そういうふうにしていくと利用してみたい気持ちになるのではないかなと思います。

どうしても大人は読書とSNSとかが対立軸にあるように考えてしまっていますが、子どもたちはそんなことはないので、その辺の利用が鍵となるのではないかなと思いました。以上です。

●新田会長 お答えという形はよろしいですか。

●米田委員 感想ですので、いいです。

●斎藤副会長 斎藤です。

質問ではないのですけれども、参考にしていただければと思います。

先ほど大澤委員がおっしゃっていた繋ぐ人というのは、これは大事ではないかなと思います。

私、前にこの協議会のときに言ったのですけれども、社会教育主事任用資格、社会教育士を持っている人を採用するというのが一つ大事かなと思いました。

それから、先ほど富田委員から質問が出て不読率云々ということと、ちょっと説明が苦しい感じでしたけれども、施設の位置づけというのを不読率というところに置かない方がいいのかもしれないと思うんです。

3つの方針の順番というのは想像（創造）、多種多様な人との繋がりで行って読書という順番になっていますけれども、この順番が結構いいのではないかなと思います。

つまり、想像するとか人と繋がるというところから読書というところに持っていければという考え方の方が、うまくいくのではないかな。それでいくと、サービスを構築する3つの機能を、誘発を最初に持ってきていますが、交流や体験から読書へ誘発するという方が、うまくいくのではないかなと、これを見て思いました。感想みたいなものです。よろしくお願いします。

●新田会長 ありがとうございます。他にいらっしゃいますでしょうか。松本委員。

●松本委員 松本です。

私もコメントだけ二点です。

一つ目は、やはりこの図書館の基本的な役割は、ヤングアダルト層をどうするかにあると思うんです。従って、札幌市の図書館がこれまでヤングアダルトのサービスをどのようにやってきたか、その問題点、反省点は何かという、その辺りの確認をしないでこの図書館にいくのは少し手落ちではないかなというのが一点。

二つ目は、重箱の隅みみたいな話で恐縮なんですけれども、小中学生を主な対象とした場合、高校生が抜け落ちてしまう。その場合、高校生に対して「こども本の森」が何かをするのか、あるいは札幌市の図書館全体として何かフォローするのかということも、大きな枠で見ると含めて考えた方がいいのではないかと、これもコメントです。

●新田会長 ありがとうございます。他によろしいでしょうか。どうぞ。

●國仙委員 私も米田先生のお話を聞いて、中学校の図書館事情の事を思い出したのですが、図書館が中学校にありながら鍵が全然開いていない、本を読む機会が全然ないと。ましてや部活動、塾というような形で今の中学生がとても忙しい。小学校で読書に慣れ親しんできた子どもたちが中学校で本を楽しみにして、本を読もうとしても図書館の鍵がかかって入れない、そのような実例があるのも事実なんですね。

ですので、もちろんこちらの「こども本の森」のコンセプトは素晴らしいと思うのですが、地域密着型というような形になると、足元の学校の整備ですとか、そういうところにももう少し目を向けてもよろしいのではないかと考えています。

●新田会長 ありがとうございます。よろしいでしょうか。

こちらは全国で6番目の施設で、大学に設置されるところとしては初めてかと思います。そういう意味で言いますと、やはり大学の力をどのように活用するか、あるいは連携していけるかということが大事なポイントで、そこがうまくいけば非常にユニークな図書館が出来上がるだろうと思います。

それから大澤委員の懸念がありましたが、ほかの大学あるいは大学生が参加できないかということですが、道内でも全国の大学図書館の協議会のようなものがありますので、そういうところに働きかけていくと、各大学の学生たち、あるいは教員に協力してもらうことも可能かと思います。

ただ、そのためにやはり重要なのはそこを繋ぐ人材かと思います。そこをどう確保していくか、あるいはどう各大学あるいは学生たちに知恵を出してもらうかというようなシステムを考えていくと。そういうことが、今後これがユニークなものとなっていくために、非常に重要なところかなと思います。

それからもう一つは、森のように本を集めるための財政的な基盤をどう確保していくか、図書館としては頑張りたいというところかなと思っております。

この議題に関してはこれまでということではよろしいでしょうか。ありがとうございます。

それでは議題の3番目、令和5年度の来館者アンケートの結果について、事務局からお願いいたします。

●事務局（上田企画担当係長） 企画担当係長の上田と申します。説明させていただきます。資料3の方をご覧ください。

表紙をめくって1ページをご覧ください。来館者アンケートは、図書館サービスの質の向上を目的に、平成23年度から毎年実施しております。令和5年度につきましては、いわゆる図書館条例に基づいた、私たちは条例館と申しておりますが、中央図書館、地区図書館、えほん図書館、図書・情報館の12館については令和5年10月に各館2週間程度で実施しております。区民センター、地区センターなどの図書室では、9月から翌年2月までの間の都合のよい時期にアンケートを実施しております。

2ページの下をご覧ください。青い字で「Ⅱ各館の満足度」とございますが、こちらの表では各館における項目ごとの「満足」及び「どちらかといえば満足」の合計の割合を表しております。条例館全体における「9 全体的な満足度」が94.1%となっておりますが、この数値は「さっぽろ読書・図書館プラン2022」の成果指標となっております。計画期間最終年度の2026年度の目標値93.0%を現時点で上回っております。

次の3ページからは、各館におけるアンケートの集計結果となります。

4ページをお開きください。4ページからは中央図書館の結果になります。特に満足度も高い項目が「6 図書館内の設備」「8 図書館職員の対応」「9 全体的な満足度」の3項目となり、図書館全体として見たときの傾向と同様の結果となっております。

5ページの上の方をご覧ください。独自項目である「1 調べ物でWi-Fiが利用できる座席の数」については、今回満足の割合が4割程度とやや低い一方で、ベージュ色になっている「わからない」の回答も同じく4割程度になっておりまして、利用者に対し、Wi-Fiを利用できる席がうまく周知されておらず、利用率自体が低いことが考えられます。このWi-Fiが使える席については、今年の2月に中央図書館の2階で一部リニューアルを行いまして、座席数も増やしましたので、今後の満足度に注視することといたします。

続いて7ページをご覧ください。7ページからは、えほん図書館の結果となっております。絵本専門の図書館として来館者のほとんどが子どもを連れての来館になりますが、「1本の種類・数」の満足度が高くなっています。また、8ページの上の方にえほん図書館の独自項目についても記載がございますが、「絵本のさがしやすさ」「子どもの読書の場として役に立ちましたか？」という設問についても満足度が高くなっています。

その他の意見・要望等については、子どもがくつろげるスペースを整備してほしいといったようなご意見を多くいただいております。

続いて9ページからは、図書・情報館の結果になります。

ほかの図書館に比べて「8 図書館職員の対応」の項目が満足度83%とやや低く、「わからない」が12%と高くなっているのは、図書・情報館が本の貸出を行っていないことでカウンターで職員と会話をする機会が少なく、職員との間で距離があるように思われてしまうことが原因の一つと考えられます。

10ページの上をご覧ください。

図書・情報館の独自項目の二つ目、座席予約システムに対する満足度については66%と低く、こちらについては座席を自由に選択できないことや、一度に予約できる時間が短いことについて不満とする意見が見られました。

その下の、「その他の意見・要望等記述」のところ、幅広い意見をお寄せいただいたのですけれども、「感謝・激励」が全体の43%を占めておりまして、独自のコンセプトでサービスを行っている図書・情報館を応援する声が多数寄せられました。

続いて12ページからは、地区図書館の9館分をまとめたものになっております。

主に満足度の高い項目は「6 図書館内の設備」「8 図書館職員の対応」の2項目になっております。

13ページの、その他の意見要望については「新刊を増やしてほしい」「特定ジャンルを増やしてほしい」「蔵書検索システムの機能向上」について望む声が多かったようですけれども、感謝、激励の声も全体の23%ほどを占めており、身近な施設である地区図書館に親しみを持っている様子がうかがえます。

31ページをご覧ください。31ページからは図書室についての集計結果がまとめられております。地区図書館の傾向に近く、蔵書数についての課題は見られるものの、「感謝、激励」の意見も多く寄せられており、地域から親しまれていることがうかがえます。

33ページからは実際に配布したアンケートの用紙と、各館の設問の独自項目の一覧を参考として付けてございます。

さらにページをめくっていただいて、35ページの次からは別紙という形で、条例館についての詳細分析を載せております。内容が重複する部分もあるので、簡潔に説明させていただきます。

別紙の1ページが横向きになりますけれども、各館のアンケート回収率の推移を載せてございます。説明は省略させていただきます。

2ページでは各館それぞれのアンケート回答者の年齢構成を比較しております。中央図書館では20代、薄紫色ですけれども中央図書館は少なく、それ以外の世代はまんべんなく来館されているようです。

えほん図書館は20代、30代と子育て世代が8割ほどを占めており、図書・情報館では20代から50代までの現役世代が7割を占めておりまして、それぞれターゲットの世代が多く来館しているようです。

一番下が地区図書館9館をまとめたものになりますけれども、全体の6割が50代以上の利用者になっております。

4ページをご覧ください。4ページでは、回答者の住んでいる住区構成を比較しております。基本的にはどこの図書館でもその区に住んでいる利用者の割合が高くなっていますが、豊平区在住者（オレンジ色）は中央図書館やえほん図書館などでも割合が高く、恐らくですが、交通の便の良さが影響しているのではないかと考えられます。

続いて6ページをご覧ください。6ページでは回答者の職業の構成を比較しております。

特徴として、えほん図書館では会社員・公務員（青色）の割合が高く、子どもを連れた親世代の利用が多く見られます。図書・情報館でも会社員・公務員（青色）の割合が高いのですけれども、自営業・自由業（オレンジ色）の割合も他の図書館よりも高く、ビジネスパーソン支援のコンセプトどおり利用者が多いことがわかります。

続いて12ページをご覧ください。調査項目ごとの満足度の集計になっております。右上の方に、円状のグラフになっておりますけれども「10 電子書籍の種類、数（札幌市電子図書館）」の項目がどの館でもグラフが凹んだ状態になっており、満足度が低いことがわかります。

続いて14ページになりますけれども、こちらは回答における「わからない」と「無回答」を除いて集計したものになっております。「10 電子書籍の種類、数（札幌市電子図書館）」の項目が7，8割程度に回復しており、このことから、電子図書館について「わからない」「無回答」とした人が大変多いということで、来館者にとってまだまだなじみが浅く、周知・広報の強化が課題であると思われます。

来館者アンケートの説明については以上になります。アンケートの結果や寄せられた意見を参考に、今後も図書館サービスの向上に取り組んでまいります。また、アンケートの結果については後日ホームページで公開するとともに、各図書館でも紙で掲示を行いたいと思っております。以上です。

●新田会長 ありがとうございます。ご質問、ご意見ございましたらいかがでしょうか。佐藤委員どうぞ。

●佐藤委員 すいません、少し内容から外れるかもしれませんが、カスタマーハラスメントが今どの現場でも結構問題になっていると思うのですが、札幌市の図書館の状況が今どうなっているかということと、現場に立つ司書は女性が多いかなという印象があるので、その方々の快適に働けるような環境作り、ケアみたいなものはどうなっているかということを教えてください。

●事務局（今堀利用サービス課長） 利用サービス課長の今堀と申します。カスタマーハラスメントの問題は最近注目されていまして、札幌市全体としても啓発などが始まっているところです。

私どもの方でも、札幌市の啓発するポスターというものを数点貼ったりしているところです。同時に職員に対しては、困ったことがあったらすぐ相談するようにというふうな周知をしております。

現時点で特別深刻なハラスメントとまで言えるものは、起きていないという認識です。

●新田会長 よろしいでしょうか。他にいかがでしょうか。松本委員。

●松本委員 松本です。来館者アンケート、これはこれで重要なのですけれども、非来館者アンケートですね。つまり札幌市の市民で、なぜあなたは図書館を利用しないのですかと。もっと言うと、札幌市民全体が今どういう読書傾向を持っていて、あるいは書店に対してどういう印象を持っているかという意識調査のような、アンケートを取るご予定はありますでしょうか。

●事務局（筒井調整担当課長） この後ご説明する、令和5年度の図書館の在り方調査研究というものがあるのですが、実は令和4年度から調査研究を行っておりまして、令和4年度は利用者だけではなくて、図書館を使っている、使っていないに関係なく、無作為抽出した3,000人に対してアンケートを取ったものがございます。昨年度の協議会でもご報告させていただいておりますが、こちらで、そもそも図書館は利用していないという結果が実は47.2%ございます。

これをどう評価するかというのは、もちろん半分の方に使っているという評価をするのか、半分近くの人が使っていないという評価もございますし、それから、どういう理由で図書館を使っているのか、使っていない人も含めてどういう機能を図書館に求めているかを聞いているものがございますので、そういったものを含めて今後、これから図書館がどのようなところを目指すかを検討していこうと考えております。

●松本委員 図書館で、すでに調査をされていたんですね。少し不勉強でごめんなさい。

●新田会長 他にいかがでしょうか。大澤委員どうぞ。

●大澤委員 大澤です。図書・情報館の学生、使用している年代のことなんですけれども。行くたびに若い人が結構いると思って見ているのですけれども、アンケートを見たら、10代は極端に少ないということで、ちょっとびっくりしました。それは例えば宿題や受験勉強でスペースを利用するけれども、実際に本を読んでいないと受け取っていいのか、そもそも見かけてはいるが、それほど10代は来っていないといったお話なのか、中身のところをお聞きできればと思ったのですが、いかがでしょうか。

●事務局（上田企画担当係長） 図書・情報館に以前おりましたので回答させていただきますと、一日で利用者層が午前、昼間、夕方、夜と結構、様変わりしておりまして、午前中や昼間については高齢の方も含めて利用が多くあるので、全体の結果として見れば学生が低く見えてしまうというのは、一点あるかと思っております。

そして、図書・情報館の実際のエリア、2階の自動ドアの内側が図書・情報館になりますけれども、座席に限りがあることから、現状ではいわゆる学校の宿題などはお断りしている状態で、2階のフリーのフロアのところで学生も多く利用されてるのかなと思ってお

ります。

●大澤委員 私もそういう印象を受けていて、フリーで学生が自由に使って良い、勉強、作業して良いスペースは若い人が来ている印象があるのですが、実際に中に入ったときに学生や若い人は確かに少ないかもしれない、外で勉強している人を呼び込めているのかは確かに微妙なのかもしれないと思って、聞いておりました。ありがとうございます。

●新田会長 他にいかがでしょうか。

私から1点だけ、2ページの総括で全体的な満足度が目標値を上回っています、それでよろしいですねという話でしたけれども、全体を見るとやはり相当、いわゆる満足度が高くない項目が相当あるわけですね。

電子書籍については少し分析を聞かせていただきましたけれども、他のところについても、少なくとも5割を切っているような満足度のところも結構あるわけですから、むしろそういうところに焦点を当てて分析していくとか、改善策の方を考えていくという方に、やはり視点を向け変えるべきだろうと思うんですね。そうしないと最後、目標値94%を上回ったからいいのでしょうかということで終わりがちになるのではないかと。実際はそうではないのだろうと思いますけれども、そういうふうに見えてしまうところがありますので、説明の仕方あるいは分析の仕方、目の付け方に少し意を用いていただければと思います。

他はよろしいでしょうか。

では議題の4番目、令和5年度図書館の将来の在り方についての調査研究の報告、これにつきまして事務局から説明をお願いします。

●事務局（上田企画担当係長） 企画担当係長の上田と申します。資料の4番をご覧ください。「さっぽろ読書・図書館プラン2022」に基づき、令和4年度より図書館の在り方について調査研究を行ってまいりましたが、令和5年度は地区図書館の将来像に焦点を合わせて行いましたので結果をご報告いたします。

まず札幌市に近い規模や参考となる取組を行っている都市の調査結果をまとめたものが、1枚目の左側になっております。

次に右側についてですけれども、地区図書館の調査について、施設として単独になっている、単独館と申していますが、単独館の東札幌図書館と、複合施設にある厚別図書館をそれぞれ調査いたしました。

現在の機能配置の課題としては、単独館については1階に本棚が集約されていて、2階については一部活用しきれない空間があったり、複合施設については他の施設との繋がりを意識した機能配置がされず、連携が不十分であるといった指摘がございました。

裏面をご覧ください。「地区図書館が持つべき機能と業務」という表についてですけれ

ども、地区図書館に求められるサービス・業務とそれを担当すべき主体について整理したのになっております。①は重要な決定に関わり、設置者として判断を決定していく必要がある業務、②は現場の組織として判断して実施していく業務、③は司書資格など専門知識を有しないと実施すべきでない業務、④はスタッフの判断で実施していく業務と整理してございます。

こういった業務の整理に基づき、図書館業務に民間の能力を導入している自治体におけるメリットとデメリットを右上の表にまとめてあります。他都市への調査でも、市民グループと向き合うには直営が望ましいとする自治体もございましたし、指定管理者と信頼関係を維持して長期間、雇用された職員の知識が運営に活用されていると回答した自治体も、どちらもそれぞれございました。民間活力の導入そのものが目的ではなく、目指すべき図書館像の実現のためにどうすべきかという観点で検討することが重要と指摘されております。

続いて右下のところですけれども、「居心地の良い空間」について最近の新しい図書館の傾向を調査したものがまとめてございます。例えば「音」については賑やかさを前提とした空間を作り、静粛なスペースを一部確保するといった図書館が増えています。また「光」については、資料の読みやすさからすると白い光が好ましいですけれども、滞在空間としては白熱電球のような落ち着いた光が好ましく、また最近は紫外線対策をしたうえで、窓が大きく開放的な造りで外の光を入れるといった図書館が増えているようです。

2枚目をご覧ください。今回の調査のまとめである地区図書館の将来像の提案になります。日本全国で地域活性化において図書館に期待が集まる理由として4点挙げられておりますけれども、一つ目は、図書館はまちを創る人の学びを支え、育む施設である点です。学びを支える資料費の確保が必須となります。

二つ目は、図書館は最も敷居の低い公共施設である点です。禁止事項、特に会話禁止と飲食禁止をやめて、気軽に立ち寄れる滞在型図書館へすることが重要です。

三つ目は、図書館は人と人、人と団体、団体同士を繋ぐ施設である点です。貸出中心の役割を脱し、交流・活動の拠点になる必要があります。

四つ目は、図書館は地域情報拠点となる施設である点です。過去の郷土資料だけでなく、現在とこれからの地域情報について積極的に発信していく必要があります。

その下に図がございしますが、札幌市が目指す4つの将来像それぞれについて、今後行うべき取組について提案が述べられています。

「生涯にわたり人の学びを支える」地区図書館としては、情報リテラシーを高める場となり、小中学校やシニア世代への支援を行うべきとの提案です。

「暮らしと仕事に役立つ」地区図書館としては、地域の情報拠点や相談窓口になるべく区役所の各課や病院・大学との連携、産業活性化に役立つ資料を充実させるべきとのことです。

「地域を良くする」地区図書館としては、広く市民活動を支援し、交流や発表の機会を

作るべきとのことでした。

「もうひとつの居場所になる」地区図書館としては、館内に憩いと交流の場や芸術文化との出会いの場を作り、住民や来訪者にとっても居心地の良い空間にすることです。

最後に裏面になりますけれども、こちらの図は図書館のゾーニングモデルになっております。エントランスから入ると、展示スペースに図書館で特に提供したい情報があり、それをきっかけに多くの詳細な情報に進むという配置ですとか、エントランス入口を賑やかな空間とし、奥に進むにつれ、静かな、静寂な空間に区分けすること、または、ふらっとやってきて、偶然情報と出会う「本との出会い」の機能を配置することですとか、そのふらっとやってくる行動を促すためにカフェ機能を導入することが重要であること、などが述べられました。

調査研究の報告としては以上になりますが、この結果を踏まえ、様々な取組を進めていく必要がありますけれども、地区図書館の現在の実態としては設備が古い、資料費が少ない、窓口業務で忙しいことで、なかなか新しいことに取り組めない課題があるのが現状です。

まずは、図書館DXと私たちは申しておりますが、えほん図書館にあるような自動貸出機などを導入して業務効率化を進めるですとか、施設のリデザイン、リニューアルを行うといったことを事業化できるよう検討してまいります。

図書館DXに関しては、調査研究業務を今年度実施いたします。資料にICタグを貼ることや、情報システム機器を導入することに多額の経費がかかることから、それによる効果を検証し、どのように進めるべきか調査研究してまいります。以上です。

●新田会長 ありがとうございます。

あくまでも、将来の在り方についての調査研究の概要報告ということでしたが、何かご質問、ご意見はございますでしょうか。富田委員。

●富田委員 富田です。2枚目の後半、地域住民への積極的なアプローチという項目を具体的に詳しく聞かせていただければと思うんですけれども。と言うのは、前に勤めていた高等学校で図書局というのがありまして。掛け持ちで来ている子が多くて、さらに図書局でなくても、図書局のサポートというのも募集して、非常に緩い部活でどんどん空いている生徒が集まってきて、その中の面白い話でライブ・イン・ライブラリーというのがあります。これは全く教員が入っておりません。

ライブラリーの中のライブですけれども、音楽活動をやるのではなくて、何か話したい生徒が勝手に手を上げて場所を提供すると。行きたい生徒だけ集まるのですが、それが10人だったり30人いたりする。単発の行事でなく年間を通して行われております。若い人たちにとって、理想的な図書館ってこういうものなのかと、逆に教えられたんですね。そういうシステムを作動して活性化したのは、やはりサポーターたちです。局員だけではなく

て、どんどん輪ができていく。

この部分でお聞きしたいのが、具体的に札幌市の図書館として、サポーター養成について何か構想みたいなものがあるのか、あるいは、具体的に現在行っている活動があるのか、お聞かせいただければと思います。

●事務局（筒井調整担当課長） 調整担当課長の筒井です。こちらに書かせていただいているのは、あくまでも今回の調査研究で提案されたことですか指摘されているものになりまして、これを今札幌市がやっていますということではないのですけれども、図書館で今やっていることとしては、図書に関するボランティアさんの活動の支援ですとか、生涯学習財団のご近所先生講座を図書館を舞台に実施していただいて、関連するような本を紹介していくような活動になります。なかなか限られたところで実施しておりますので、これから地域の学びの拠点として機能させていくときには、図書館だけで実施するのは難しいと思いますので、区民センターなどの地域のコミュニティ施設ですとか、地域にあるいろいろなものと連携しながら、そういった取組を広げていければいいなと今のところは考えております。

●新田会長 よろしいでしょうか。他にいかがでしょうか。

●斎藤副会長 斎藤です。先ほど来館者アンケートの中でもちょっと出てきたのですが、図書・情報館の外にいる中高生、もしくは大学生もいるかもしれないですけれども、その人たちへの対応が何も無いような気がするのですが。居心地の良い場所というものの、2枚目の右側、「もうひとつの居場所」というのもありますが、中高生、大学生の勉強への対応はいかがですか。

●事務局（筒井調整担当課長） 図書・情報館ということではないのですけれども、例えば自習、あるいは自習だけでなく学びに来る方というのは人生のどこの場面でもあるかと思っておりますので、そういった方たちも図書館の資料を使っていなくても使えるような状況、アンケートでいろいろなご不満も出ている状況なので改善の余地はいろいろあると思うのですが、図書館の資料を使って図書館を活用していただく人と上手く棲み分けた対応をするためには、やはり座席予約システムですとか、図書館の作りの問題、そういったところを考慮して、いろいろな人たちがいろいろな目的で図書館を使えるようにしていきたいと思っております。

今すぐ見えるものとしては自習ですとか、そういったものに対応するために、長い時間を1人の人たちに独占されてしまうとやはり不公平感が出てしまいますし、そういった人たちが多くなれば図書館の資料を使う人が使えないとなっても困りますので、そこをうまくシステム的に解決するようなものを導入できないかというのも今回、図書館DXの中で検

討していきたいなと考えております。

詳しく触れていませんけれども、将来の在り方にはそういったものも含まれております。

●新田会長 よろしいでしょうか。大澤委員。

●大澤委員 民間活力導入の効果と課題で、指定管理者制度のお話が出ていたと思うのですけれども、私が博物館でお仕事をしていることもあり、どうしても指定管理者制度というのが課題であったり大きなテーマになっているのですが、デメリットで有るとおり、司書業務ですとか図書館の運営ですとかそういう中核的な協議のところに指定管理者を入れるということも、難しさや課題は全くその通りと思いつつ、最後のページで、ふらっとやってくる行動を実現するためにカフェ機能の導入というのがあって、もし何か民間が入るとしたらやっぱりこのカフェでしたりとか、ゾーニングの最初の入口の部分に民間の力でしたり、そういうメリットとなるようなものを入れるというのが、具体的、実現可能な部分ではあるのかなと思っております。

なのでそういった部分をもし民間が入るとしたら、カフェが可能なのかというところと、もしかしたら民間を入れる可能性があるのかどうかというところをお伺いしたいです。

●事務局（筒井調整担当課長） 多くの問題を含んでおりますので、ここで明確な方針というのはお示しできないのですが、ここに書かれているとおりのいろいろなことを検討していきたいなと考えております。

今のままの状態で、どのような運営が本当にふさわしいのかですとか、あとはこれからやはり長い年月の中で建て替えていくときが来ますので、そのときにいろいろな運営手法、行政機関も民間の方に作っていただいて、その中に民間施設も入れ込むというような手法もございますので、図書館も検討に一緒に入って、いろいろなことを考えていきたいなと思っております。

ここで明確にこの方針で今考えていますとは言えないのですけれども、図書館としても様々な検討をしていきたいなというふうには考えております。

●大澤委員 ありがとうございます。カフェ機能の導入が重要と書いてある割には、どうするかという話はあまりなかったので、ご指摘させていただきました。

他施設でカフェが撤退された例を見ると、企画展等の展示替えの時期などで恐らくお客様をたくさん入れられず、採算が合わなかったのかなと思いました。そういった意味で民間の方が協力するからには民間の方にもメリットがないといけないので、その調整がやはり必要になってくるのかなと思いました。以上です。

●事務局（筒井調整担当課長） カフェに関しては例えば中央図書館ですとか、白石区複合庁舎で元気カフェという、障害のある方に運営していただいているものがあります。そういった方にカフェを担っていただく方法もあるかと思ひますし、今おっしゃっていただひように民間の方に貸す、店子として入っていただく方法もあるかと思ひますし、先ほど申し上げたように施設全体をどのようにしていくかというところから入っていただくですとか、いろいろな手法があると思ひますので、様々な検討をしていきたいと思ひています。

●新田会長 他にいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

私の方から、1枚目の左側、政令指定都市との比較というところを見ますと、札幌市の図書館としてはこれを少なくとも第一歩、市全体の共通認識まで持っていくということが必要で、これをバネにして図書館として次のいろいろ財政的な方策を考えていくということだろうと思ひますので。なおかつ右側の地区図書館の調査の最下段のところも、館の配置はそれなりだけれども、購入数が圧倒的に少ないというような指摘があるわけですから。この辺りをぜひ今後の活動に生かしていくという視点で、良くなっていいただければというふうに思ひます。

よろしいでしょうか。

それでは今まで4つの議題を扱ってきましたけれども、全体として何かご意見、ご質問がございましたらお伺ひしたいと思ひます。よろしゅうございますか。

ありがとうございました。それでは本日の議事はこれで終了でございます。事務局お願いいたします。

3. 閉 会

●事務局（中村運営企画課長） 新田会長、どうもありがとうございました。

それでは以上をもちまして、協議会第1回会議を終了させていただきます。本日は誠にありがとうございました。

以 上